

ビニルトンネル内及び外で灌水が多くなならないようにして採光と通風が十分となるように好天日はトンネル外にさらした。

供試品種はフヂガネとした。

本圃は畦巾45cm・株間6.0cmの1本植えとし、その他は標準耕種法によった。

その結果第2表にみられるように活着がよく、出穂成熟が順調に行われ、稔実歩合が高く、高位収穫をあげた。

すなわち早植当時は第1図のように土壤水分が高く、3.5°Cくらいの低温があったが、仮植苗より好成績をもたらしたことは、早期には根毛の活動が旺んで有効茎が確保され、いわゆる基本栄養生長量及び生殖生長量が多くなるために収量が高まるものと考えられる。

播種箱育苗期間は1播種箱当り50g播きで30日くらい、100g播きで25日が妥当であることは1958・1959両

年とも同様であった。

3. 摘 要

1. 定植期はビニルトンネル育苗では地表温の最低が10°C以上が望ましいが、一般的には定植後に水霜が2〜3回はあっても、土壤水分が活着に大きな影響をもっているから、5月15日頃から移植日和をみはからって早目に定植をした方がよい。

2. 電研式のダン育苗の播種量は容積を倍にした場合1ダン当り50〜100gで本圃1a当りのダンは1〜2枚を必要とする。

3. ダン育苗の無仮植苗は最低地表温が5°Cとなれば定植をやり得るので、ビニルトンネル育苗より暦上では約1週間早く可能になり、土壤水分の比較的豊富な時期に活着がみられる。

寒冷地における陸稻の移植早期栽培

第3報. 播種量・栽植密度について

高 橋 信・中 島 高 美

(秋 田 県 農 試)

1. ま え が き

昭和33年の秋田県の作付面積は2,582 haで、このうち移植早期栽培は350〜400haとなっている。

陸稻の移植早期栽培についてはさきに第1報で品種間の差異を、第2報で直播栽培と移植栽培との生育の比較を報告したので、ここでは播種量・栽植密度について1956〜58年に行った実験の結果の概要を報告する。

2. 成績並びに考察

1. 播種量

ビニルトンネル育苗の苗床播種量を1m²当り60gから240gの間の4段階とし、穂数型の陸稻農林22号と穂重型のミヤマモチを供試し、また1m²当り120・180・240gの3段階で条間6cmの条播と散播とした。その他は標準耕種法によった。

その結果第1表及び第1図にみられるように薄播きほど良苗となり、散播よりは条播がよく、実用的には1m²

当り120〜180gの条播で、穂重型の品種は穂数型品種より20〜30%増播でもよい。

なお1a当り苗床面積は1.3〜2.0m²が標準とみられる。

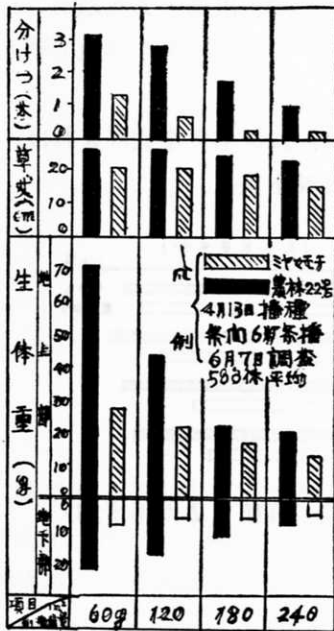
2. 栽植密度

苗床播種量は1m²当り120g・180g、本圃1a当り株数を3,000・6,000の1条植えと千鳥植えとし、また1a当り3,600・2,400株で1株1・2・4・5本植えとして肥料は標肥と5割増肥とで実験を行った。

第1表. 陸稻の苗床播種様式と収量(昭32豊島)

1m ² 当り播種量(g)	5月5日の全葉数(枚)	活着期(日)	1a当り収米量(kg)	比 率 %
条 播				
120	8.5	5.31	21.4	
180	8.0	6.2	20.3	
240	6.0	6.3	19.0	
散 播				
120	7.0	5.31	21.3	
180	7.3	6.1	19.5	
240	4.8	6.4	17.6	

注: 供試品種 農林22号・4月11日播き5月24日植え。
本圃60cm×6cm1本植え。
苗床1.6m²1区 本圃5m²2区分割区試験法。



第1図. 陸稲移植早期栽培の苗床播種量と苗の生育

栽培の施肥標準の5割増肥とし、畜力・機械力の利用でできる45～55cm畦に株間6.0～6.5cmの1本植えが妥当と考えられる。

その結果第2表にみられるように本圃で45cm畦と60cm畦との間及び千鳥植えと1条植えとの間に著しい差はみられなかった。

標肥及び5割増肥とも単位面積当りの株数を多くして、1株本数を少なくした方が収量の高い傾向を示した。

従って一般的には苗床1m²当り150～180gの条播で、本圃は直播

第2表. 陸稲移植早期栽培の栽植密度と収量

a当り株数	標肥 a当り 玄米量 kg	比率 %		a当り 株本数	a当り 株間 cm	a当り 条間 cm	1株 本数	標肥 a当り 玄米量 kg	比率 %		増肥 a当り 玄米量 kg	比率 %	
		50	100						50	100		50	100
3000(60×11千鳥)	20.8			3600	6	3600	1	40.5			44.3		
6000(60×5.5千鳥)	18.3			7200	6	3600	2	34.5			41.7		
3000(60×5.5)	19.0			3600	12	2400	2	35.2			37.1		
6000(60×2.7)	18.3			7200	12	2400	4	33.4			34.0		
3000(46×7.2)	18.2			9000	12	2400	5	28.9			32.7		
6000(46×3.6)	18.8												

注: 1. 苗床 4月10日1m²当り120g条播。
2. 本圃 5月23日1株2本植え。
3. 供試品種 農林22号。
4. 昭和31年。

注: 1. 苗床 4月15日1m²当り150g条播。
2. 本圃 5月25日移植畦45cm。
3. 標肥 a当り
堆肥113kg・硫酸23kg。
過石38kg・追加0.8kg
増肥は標肥
の5割増。
4. 供試品種
農林22号。
5. 昭和32年。

3. 摘 要

寒冷地の陸稲の移植早期栽培の播種量・栽植密度について検討をして、次のような結果を得た。

1. ビニルトンネル育苗の実用的な苗床播種量及び播種様式は1m²当り120～180gの条播で、苗床面積は1a当り1.3～2.0m²が適当である。

2. 移植早期栽培は直播栽培より増収が期待できるので、直播栽培の標準施肥量の5割増肥とし、栽植密度は畜力・機械力を利用し得る45～55cm畦に、株間6.0～6.5cmの1本植えが実用的と考えられる。

水 稲 オ イ ラ セ の 畑 移 植 栽 培

上 野 司 郎・佐 藤 亮 一

(青 森 県 農 試)

1. ま え が き

寒冷地陸稲は早害に加えて冷害をうけやすく、作柄が不安定なためその作付が限定されていたが、開拓地や水田の少い農家からは主食自給の立場から作柄の安定化が強く要望されて来た。

これまでの水稲の直播や陸稲品種では要望にこたえるものが少いので、耐冷性の強い水稲早生品種「オイラセ」を用いて移植栽培試験を実施したところ、一応所期の成績を得たので報告する。

2. 試験方法の概要

1. 試験年次

1957～58年。

2. 試験地の概要

(1) 青森県農試(黒石)

下層に礫を含む洪積土壌で地下水位約1m、気象条件

良好。

(2) 青森市雲谷

標高200m、火山灰性土壌、気象条件比較的良好。

(3) 上北郡甲地村滝沢平(開拓地)

標高50m、太平洋岸から約10kmでやませの影響をうけやすく、夏季冷涼。

(4) 黒石市南(開拓地)

標高400mの準高冷地、気象条件不良。

3. 供試条件

(1) 品 種

水稲オイラセ・陸稲農林22号。

(2) 栽培法

区分	栽	培	法
直播	畦巾54cm. 播巾15cm, 播種量450g/a.		
移植	畦巾54cm, 株間6cm, 条間12cm, 2条千鳥1本植え.		